

「知事との元気まるごとトーク」(令和3年8月26日開催)

「知事との元気まるごとトーク」は、知事と地域で元気に活動している団体等の皆さんが、青森県の未来を創るために直接意見交換をする場です。

令和3年度1回目の「知事との元気まるごとトーク」を令和3年8月26日(木)に「ワークスペースSHIFT」(弘前市)で開催しました。

当日は、中南地域県民局管内の4名の方にお集まりいただき、「中南地域の多様な人財とともに考えるこれからの地域づくり」をテーマに意見交換を行いました。

当日の概要をお知らせします。

当日の出席者

株式会社コンシス	代表取締役	大浦 雅勝さん
Calm Tech	代表	古川 勝也さん (リモート参加)
さいとうサポート	代表	斎藤 美佳子さん
株式会社ふじさきファーマーズL A BO	代表取締役	松丸 良平さん

(知事)



皆さん、こんにちは。

本日は、古川さんがリモート参加ということですが、「知事との元気まるごとトーク」も長年続けており、その時代に合ったやり方、テーマで進めてきました。

コロナ禍の時代にあっても、皆さんのようにチャレンジして、自己実現、自己表現をしている方々がいるということを嬉しく思います。そして、その皆さんを手本として、後に続いてくる

方々がいるわけです。

もう大分前の話になりますが、我々が最初にプロテオグリカンを始めた時も、ストリートダンスの起業を応援した時も、いろんな声はありましたが、銀行を含めて、皆で青森の新しい時代に向けてスタートしていこうよと取り組んできたことを思い出します。まさに、この中南地域は、進取の気性がある地域だと思います。

そういった流れがあり、昨年度の本県の創業・起業者は、コロナ禍の中でも134人でした。皆さんそれぞれが、夢を叶えるため、自己実現のために頑張ってくれています。全てうまくいくわけでは無いかもかもしれませんが、チャレンジすることができて、それを支える仕組みがあって、社会が共に求めているということは大事なことだと思います。

今日はすごくワクワクして来ました。この会議の後、コロナの専門家会議があります。コロナ禍でも、我々の仕事は一つじゃなくて、どの仕事にも全力を尽くしています。大変な時代だけでも、そんなことに負けてられない、未来に向かって力を与えていただけることをすごく期待しています。本日はよろしくをお願いします。

(中南地域県民局長)



本日の意見交換のテーマは「中南地域の多様な人財とともに考えるこれからの地域づくり」です。

地方では、若者をはじめとする労働力の流出などが、地域力に影響を与えることが課題となっております。

一方、国が唱える「働き方改革」の一環で、リモートワークを導入する企業が増えている現状もあります。

これに加えて、現在、新型コロナウイルス感染症の影響により、地方でリモートワークに従事する人や、自然が多く、のびのびとした環境に魅力を感じて地方に関わろうとする人が増えています。

中南地域には、県外で経験を積んで戻って来られた方、移住して来られた方など、それぞれ得意分野で様々な活動をしている人財が沢山いらっしゃいます。

そこで、本日は、UIJターン等により、中南地域に住んで、各分野で活躍されている方々においでいただき、「中南地域の多様な人財とともに考えるこれからの地域づくり」と題して意見交換し、皆さんの経験や知識、技術など、地域人財と地元企業などの地域ポテンシャルが結び付いた場合に地域にもたらさせる効果や可能性について考えたいと思います。

皆様の御意見を踏まえ、県民局での取組など、県政へ反映をさせていきたいと考えていますので、本日は忌憚のない御意見をいただきますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

(大浦雅勝氏)

私は、弘前市出身で、株式会社コンシスの代表取締役をしています。ほかにNPO法人あおもりIT活用サポートセンター（以下「AOIT」という。）の顧問をしています。AOITでは先日まで理事長だったんですが、世代交代ということで、交代となりました。

他に学校の先生などもしていますが、コンシスとAOITで自分のリソースの70%くらいを使っていると思いますので、そのあたりのお話をしていきたいと思います。

コンシスは、この建物の2階にオフィスがあり、創業12年です。一応、黒字で何とかやらせていただいています。



Webのコンサルタント会社ですが、東京のWebと同じことをしていてもしょうがないと、農林水産業とグローバルなことを組み合わせた取組をしていこうと考えており、ITやWeb技術を使って、地域課題を解決する企業になりたいと思っています。

分かりやすいところでは、Webサイトを沢山作っており、県のサイトにも多く関わっています。本日出席の松丸さんのお店のサイトもやらせてもらっていたり、災害で大変な風間浦村も、サイトで寄付の募集をして10日ぐらいで約400万円集まっています。りんご、津軽塗、アップルパイ、嶽きみ、マグロなどのお魚、あとインターネット販売など、大体、県内の企業で400件ぐらいのサイトを作って、現在、250件ぐらい運用しており、伴走型でやっていくような企業体をしています。

もちろん、多言語のサイトも作れます。ネイティブ翻訳もいいのですが、自動翻訳の精度が相当上がっていますので、1つの日本語のサイトを作ると15か国語で配信されるような仕組みの実証もさせていただいています。

せっかく青森でやっているのだから、農家さんを応援しようということで、2012年からハーベストマーケットという、農家さんのサイトを無料で作っています。大体、260農家ぐらい登録されています。

その中の元気が良い農家さんたちと、2013年から、3年ぐらい大阪のあべのハルカスで、「りんごの惑星」という取組をさせてもらって、大阪でテレビ番組も作っていただいたり、あべのハルカスの近鉄百貨店を借りて食育のイベントなどを開催したりしています。

実際、作る方もやってみないと、なかなか農家さんたちと話をするのは難しく、自分が好きな毛豆を有名にしたいと、「最強毛豆決定戦」という、食べ比べのイベントをさせてもらっています。かなり人気があり、今は開催が難しいですが、子どもたちが作ったものが食べ比べで賞をもらうなど、人財育成にもつながっていくんじゃないかなと思っています。元気の良い、毛豆だけでご飯を食べている農家さんも生まれ、我々がやっている意味があるなと思います。

観光も少しやろう、箱モノじゃなくても経済効果を出せるよねと、地元の人が楽しめるイベントとして、桜祭りをお客さんに体験してもらおう「手ぶらで観桜会」というソフトサービスを作っています。90分で3万円という値段ですが、大体11か国ぐらいから来てくれています。外国人には3万円のサービスは安いようです。

このようなITと農業とグローバルのことをやっている企業です。大浦さん、何屋さんなんですか？って、よく言われるんですけども、基本はインターネットにあると思っています。

日本は、世界で一番インターネットの利用時間が短い国です。これは、ある意味、使う人が豊かだからなんじゃないかと思っているんですが、青森県はもっと使った方がいいんじゃないかなということで、AOITを作りました。

基本的に、青森県のITリテラシーを向上させたいと取り組んでおり、今日の会場のSHIFTも総務省のハード事業で整備しました。これは、県の新産業創造課の協力がかなりあって実現したと思っています。

こういう拠点を使いながら、UIJターンの方たちをどんどん増やしたいなと、新産業創造課と、マイクロソフトの会場をお借りして、毎年、青森県にゆかりのある人たちを集めたイベントをやらせていただいています。

去年は事情によってオンラインで開催しましたが、びっくりしたのが、2017年から19年まではモニターツアーは最高でも40人ぐらいの申し込みだったんですが、今年は似たような

お試しテレワークという事業に、3週間ぐらいで約400人の応募がありました。それぐらい、青森に来たい人たちが増えていると感じています。

U I J ターンに関しては、今後、私の親の世代に当たる団塊の世代の人たちが後期高齢者になると、面倒をみななければいけない人たちが大分出てくるはずですが。私の年代だと、子どもは2人しかいないことが多いので、やはり帰って来たいという人がこれから増えますので、どんどんこの事業は進めていただきたいと思います。

今後、取り組みたいこととしては、農林水産、I T、グローバル、この3つを自分がプレーヤーとして取り組むのもそうなんですが、教育、あと域内循環ができるような仕組みにしていきたいと考えています。

リテラシーが向上することが、青森県の基幹産業の底上げにもなるし、課題は人財育成だと考えています。人財育成するための人財そのものと、そのコストについて、今、一番困っているというか、解決しなきゃいけないと思っています。

県と一緒にぜひ取り組みたいことですが、今、お話したようなI Tの環境づくり、ただのI T教育じゃなくて、青森らしいI T教育があるんじゃないかと思っています。特に今、青森にI T人財が少ないので、Uターンしてくれた人を積極的に登用して行って、それもただ基礎的なことをやるのではなくて、ビジネスに展開できるような人たちを育てていきたいと考えています。これは、私個人でできることではないので、今日、お集まりの皆さんのお知恵もお借りしながら、進めていけたらと考えています。この後、お話する古川さんは、新しい時代の教育をしている、非常に面白い方だと思っています。A O I Tのメンバーでもございます。

最後になりますけども、折角、知事にこうやってお話する機会ですので、言い難い点もあるんですけども、言わせてください。私はUターン18年目ですが、私が帰って来た当時は、何か東京で通用しなかったやつ、都落ち、という感じだったんですが、今は凱旋パレードです。帰って来たら、ようこそよく来てくれました、みたいな、いいなって少し思ったりしていますが、そういう人たちの支援をもっとしたいと思っています。

外にいる人たちとも、もちろん一緒にやらなきゃいけないんですけども、まずやはり、ここで覚悟を持って暮らしている人たちと一緒にやりたいと思っています。なので、外の人に何かお願いするということではなく、地域の中に仕事を作っていくことを、ここにいる人たちと一緒にやらせてほしいなと思いますので、100年後の評価に耐えられるような行政経営を知事にしていただけたら、非常にありがたいと思います。やはりプレーヤーがいなくなったら終わりです。評論家やコンサルは外にたくさんいるんですけど、やる人間がないので困っているんです。今、その人間を増やそうと思っているので、その人たちにも経験値を上げさせる機会をどんどん作っていただきたいと思います。

(知事)

昔はユビキタスって言ったんですが、17年前から、ユビキタス出前授業を中学校、小学校でやり続けています。今は小学校だけですが。我々のように都会から距離が遠いところでも、高速通信がちゃんとなつがる時代になると、距離感なしで仕事もできるし、U I J ターンしても、こっちでいろんな仕事ができるようになるんだとか、各企業にも協力いただいて、子どもたちに伝えてきました。

その授業の時に青森工業高校を卒業したヤフーの先輩が来てくれて、豊かな自然の青森でも

こういう仕事はできる、と言ってくれました。大浦さん達の実現してくれている姿を見て、子どもたちも、思っていることを実現するプレーヤーになって、モデルケースとなってくれたら嬉しく思います。だから、ずっとやれる限り続けていこうと思っています。

(大浦雅勝氏)

私は、1995年からインターネットの仕事をしていて、グーグルより自分の方がインターネット歴が長いんですが、やっぱり遠い場所ほどインターネットの恩恵があるはずだと確信していました。私がUターンしてきた頃、知事がユビキタスをちょうどスタートしていて土手町で事業をしていましたが、青森県でユビキタスを著名な先生とやっていくということ自体にびっくりしました。民間はピンときていない部分もいっぱいあったのにすごいなと。

(知事)

覚えていてくれて嬉しいです。

当時から、常に新しい人財とか、若い世代に働きかけていくような仕事に取り組んできましたが、小学校でプログラミングの授業をするようになったこの時代に、こういう先輩がいてくれて、とても嬉しく思います。

それと、もう一つ、絶対的に守ろうと思ったのが農林水産業、絶対に食えるようにしてやろうと、どこにでも売りに行きました。

いろんなことをやってきたんだけど、すごく波長が合いますね。UIJターンの方も含めて、これからもここで暮らす人たちと一緒に取り組んでいきたいと思っています。

(新産業創造課)

県では、ユビキタスやキッズフェアなど子ども向けに実施しています。やはり、プレーヤーが非常に重要になっていまして、参画してくれる人、話してくれる人、提供する先生、こういったところは、まさに大浦さんが立ち上げていただいたAOITのメンバーを中心に御協力いただき、県として運営ができています。引き続き、ぜひ、そういった子ども向けの事業も協力・連携させていただければと思います。

また、高校生についても重要だと思っており、県では、県内のIT企業が専門高校で出前授業を行う事業をAOITの参加メンバーである株式会社アイティワークの岡本社長にも御協力いただきながら運営しているところです。

また、Uターンについても、引き続き一緒にやらせていただいております、短期的にはやはりそこで人財を確保することが大事だと思っています。お話にあったマイクロソフトでのUターン説明会もAOITの方に強力に御協力いただいておりますし、外に行けない状態でも、このネットワークを使ってオンラインでやっています。今年、過去の事業を見直して強化した、青森を体験してまた戻って来ていただくという事業も、具体的に育てていただいたプレーヤーの皆様と一緒に御協力させていただきながら、今後もやっていければと思います。

(地域活力振興課)

昨年度の冬から、大浦さんと一緒にリモートワークの移住促進について、弘前市、青森市、十和田市を県内のトップランナーとして、どういったプログラムを用意すれば、Uターンが促進さ

れるのかというところで、御協力いただいているところですので、引き続き一緒にやっていければと思います。

(知事)

団塊の世代の御両親の話が出ましたが、青森に帰ってきて親の面倒をみたいという場合、仕事の問題があります。知事になってから企業誘致を頑張ってきたんですが、以前「時給がある程度高くて、フルタイムじゃない1日5時間とか6時間とか働ける場所が必要だ。」と言われたことがあります。常にフルタイムの仕事が必要だと思い込んでいたので、目からうろこが落ちました。確かに、親御さんを見るのに、早く仕事が終わったほうがいい。

最近、青森でも事務センターやコンタクトセンターなどの業種の立地がかなり増えてきましたが、IT系も時給がある程度高くて、短時間勤務可能という条件を満たすと思います。

だから大浦さんがやっているジャンルは、すごくUIJターンと結びつきます。プラス農業です。松丸さんは知っていると思いますが、昨年の新規就農者が300人を超えており、農業で食えるようになると人も帰ってきます。農業もITとすごく相性がいいです。夫婦がそれぞれITと農業を担当すれば、いろんなことができます。

(古川勝也氏)



大浦さんから話もあつたとおり、私自身、伴走者であり、プレーヤーでもあるのですが、それを家族という単位で取り組んでいます。

本日は、『古川家』というライフデザイン マルチワーク家族の挑戦』ということで、私がどういったことをしているのかをお話しつつ、提言していきたいと思います。

私は、基本的にフリーランスで活動しています。防災危機の監視システムの開発者として働いていましたが、2005年にUターンしてきて、2009年に独立し、その後も業務システム開発をメインに行なっています。クライアントの業務改善から運用をどうするのかという設計、それから保守までと、基本的な業務上のクライアントのパートナーとして、全ての工程を担当するというスタイルで活動しております。

2012年に料理研究一家「古川家」という食にまつわるプロジェクト活動を開始しました。私たちが掲げているのは、暮らしを生業にという考え方です。毎日の食事は一生続くものですし、息を吸うように当たり前に行っていていかなきゃいけない、その当たり前に行い続けなきゃいけないことを、暮らしの糧にできないものだろうかと思った結果、この古川家としての活動をしていこうと決めました。

大浦さんが農林水産業とITを絡めたように、私たちは食とITと家族というテーマでスタートしました。一見、つながりがないように見えるんですが、食がそれをつないで、世代も人種も超えてある意味、生業としてできると思い取り組みました。

その中で大事にしているのは、専門家から兼業家になろうということです。私は元々システム開発のプログラマーですが、食育にも関わっているし、その他にも様々な業種と関わっています。

そもそも実家が兼業農家でそういう姿を見てきた者としては、どちらかという原点回帰かなと考えています。最近ではマルチワークとか、副業といった形になりますけど、元々そういう暮らしでしたよねと、個人的には考えています。

その中で、古川家の活動のきっかけになったのは「知ってる？世界のサンドイッチ」という食のイベントでした。弘前市内のパン屋だけで10か国以上のパンを集めて、皆でパンを好きな形に切って、好きな食材を使って、オリジナルサンドイッチを作って一緒に食べるという企画があって、これが結構好評いただいて、いろんな児童館や小学校で毎年開催していました。調理体験だけではなくて、その前に、サンドイッチの由来は？とか、サンドイッチという町は、実はイギリスにあって港町なんだよ、とグーグルアースなどを使って座学を行って、食文化、食、料理に関心をもってもらってから、一緒に皆で食べようねという取組をやっていました。

その次には、中南地域県民局の事業にずっと関わっていました。農家さんのカフェ開業プロデューサーということで、メニュー開発とか空間設計から最初スタートして、その他に情報発信、ITをどう使いましょうかということまで、結果的にトータルのプロデューサーになりました。

青天の霹靂を使ったお寿司づくりでは、Lineで予約できるようにしたり、あと、花農家さん、食用花を使ったスイーツの開発を提案してみたり、岩木山で取れるメープルシロップを作ったスイーツの提供と発信などをお手伝いしました。

ただ、先ほどのサンドイッチのイベントも、農家さんのカフェも、現在ストップしているものが多数あります。やはり、コロナ禍で非接触と非同期というのが前提条件になっているので、今回のリモートで参加でいろいろ御苦勞をかけたとは思いますが、新しい形に対して挑戦するきっかけとなっているかなと思っています。

その中で、コロナ禍の前からずっとやっていたことですが、りんご農家さんが直販の体制を作るために、ネットショップを作ったり、お客さんのデータを一覧化してメルマガにして、インターネット上だけで集客から購入までの動線を作ったりするなど、お手伝いしました。その他にも、美紅(みく)という赤い果肉の新品種のりんごを県外の方に非対面で届けられるようにという取組で、商品ラインを企画して、ネットショップでギフトパッケージをデザイン、写真や説明する文章とかも全部、古川家で作っています。そういったのも、結局、インターネットを活用してきたからこそできることなのかなと考えています。

先ほどの農家さんのカフェに関しても、元々農家さんの取組は素晴らしいものばかりで、生産活動をそのまま続けていただくことが一番と考えているんですね。ちょっとしたツールの導入だったりとか、情報の整理がほとんどなんですね。これも結局、私からすると、システム開発の経験をこういった異業種に活かすことで新しい仕事生まれてくる、というのが一番大事なことだと実感しています。

プラス、こういった農家さんとの付き合いの中で取り組んでいるのが、全て現金でお支払いいただくのではなくて、物品払いという制度をとっています。現金プラス農産物で、親戚のお家に行ったら野菜をもらって帰るみたいな感じです。りんごをひと箱もらった方が、1万円もらうよりも、自分は長生きできるなと思うので、そういうふうに食べ物でいただくことや、体験とか知識などで、お互い交換し合って支え合うという伴走者のスタイルをとっています。

ITの活用は、教育とも相性が良くて、自宅のリモート学習を家庭内で取り組んでみたんですけど、これも手ごたえは感じていました。今、子どもたちのやりたいことのトップが動画を作ることだそうですが、以前から、うちの娘には、YouTubeやってみたいならやればいじや

んと、自分で撮影して動画を作って公開まで何度もやっています。自分で始められるようになったので、個人、法人を問わずにいろんな形で自ら動いてやってみようというのがベースになっていると考えます。

今後、取り組みたいこととしては、リモート環境の促進です。家庭レベル、個人レベルでいえば、スマートフォンが一人1台ぐらい普及したことは大きなことと思っています。ただ、どうしたらいいか分からないということで、お互いに学習しあう環境を構築していきたいと思います。そこで、慣れたところで、タブレットを買うことにしましたとか、高速のインターネット回線を導入することにしましたとか、少しずつ裾野が広がって、設備投資も進んでいく、環境を充実させていくというふうに伴走できればなと思っています。

また、WEB版相談事例集というものを構築したいと思っています。いろんな業種から御相談いただくんですけども、ITをこれから使っていく人は、大体最初の悩みが似てるし、スタート地点が同じです。私みたいな事業者の回答も大体似ています。なので、そういったものを蓄積してインターネットに公開することで、簡単に相談事例を探ることができるようになるかなと思います。

今後、自分で取り組んでいきたいと思っているのが、広報媒体です。今、SNSとか、いくらでもインターネットの手段がありますけども、全てインターネットを使うのはやはり無理です。紙媒体もすごく大事で、新聞、ラジオ、テレビ、そういったもの、あとは広報紙などを活用して、インターネットでは届けられない人こそが、実は最も情報を必要としているケースが多々あるので、そういったところに周知をできればと思います。

さらには、県には、前例なき挑戦を良いことだとみなす土壌を作って、この土地でもっと新しい取組をして、仕事を作りながら生きていけるようにしてもらえればと思います。私は、毎日、古川家ご飯ということでSNSで発信しているんですけども、県産品の消費を拡大するためにオリジナルのレシピを作って、SNSで発信するなど新しいことにどんどん取り組んでいただければと思います。今は一人に1台スマホがある時代ですが、私自身もITで生活を豊かにできた人間だと感じているので、新しい取組を通じてその裾野を広げていけるかなと思っています。

私からの話は以上になりますが、プログラマーでありながら、やっていることがプログラムを感じさせないものが多いんですけども、もしお手伝いできるというところがあれば一緒に取り組んでいければと思っています。

(知事)

食、農業と一緒に連携するということを進めてくれて、すごく嬉しいです。私たち、青森県の最も得意分野は、やはり食と農業の分野だと思うんですけども、それとITが連携することによって、お互いに良い道ができると思います。

さっきも話したとおり、昨年約300名の新規就農の方がいて、うちIターンが100名くらい、それくらい増えてきているんですけども、そういった方々はITを使いこなせるんだけど、その上の世代も含めて使いこなせるようになれば良いと思います。古川さんたちみたいな農業のことも含めて応援してくれる方々が間に入って、いろんなことができればと思います。

それと、紙媒体も含めた広報の仕方について提案いただきましたが、我々、毎戸配布誌にQRコードをつけるなど、どこからでも情報にアクセスできるような工夫をしています。

そのほか、例えば、東京で行うUIJターンのフェアの告知は、青森にいる親御さんを通じて

お子さんに知らせることがすごく大事なのですが、8月にフェアやりますと新聞に普通の紙面広告を出してもお子さんには伝わらない。ところが、新聞から抜き取れる別刷りのものになると、それを取っておいて、お子さんに伝えてくれるということがわかりました。今の時代は、年代ごとに使う媒体とか広報手段が違ってはいますが、今後も、広報活動の場面においては、様々な媒体を効果的に活用していきたいと思います。

(新産業創造課)

古川家のスタイルは、非常に新しくわくわくする話だと思っています。いろんな異業種連携を商工労働部でやっていきたいと思っています。

テレワークについて、移動制限の中でも、デジタルは距離を越えるものだと思っていますし、それをサポートしていく人財も非常に重要で、AOITと相談をして窓口を設置して、専門家派遣支援をやっているところです。

こういったものをサステナブルに、県として皆をITで支えていくような仕組みと一緒に古川さんやAOITの皆様と作っていききたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

(地域産業課)

Web上での相談事例集について、私共は経営支援を主に担当している部署ですが、やはり企業さんからの相談内容というのは、共通しているところがあり、古川さんの着目点は非常に重要だと認識しています。

県の産業支援機関の21あおもり産業創造支援センターでも、実はその辺のシステムの構築を検討してはいて、古川さんと連携してできる場所もあるかもしれませんので、今後検討させていただければと思います。

(広報広聴課)

知事からもお話があったとおり、県では、偶数月に、県民だよりを発行していますし、毎月の新聞広報、毎週のテレビ・ラジオの広報、様々な媒体を活用して広報活動を展開しています。

いずれも、受け手である県民の立場に立って広報することが基本であり、幅広い世代を意識しつつ、県の広報を見て、聞いて、読んでもらえる工夫をしながら広報したいと思っています。

最近は新型コロナウイルスの関係で、知事が話したようにQRコードを活用していち早く情報を届けようと、市町村の広報紙とも連動して広報をしているところです。

時代が、今、インターネットの方に移りつつあるというようなことではありますが、やはり様々な媒体を活用して、県民に必要な情報を届けていきたいと考えています。今、県のホームページの見直しもしていますけども、これからもよろしく御協力をお願いします。

(知事)

紙媒体から映像媒体、ウェブ媒体まで、結構苦労してやっています。紙媒体は10月号の締め切りが8月であるなど制約がありますが、それぞれの特性を活かして、広報していきたいと思えます。

(総合販売戦略課)

県産食材を使ったオリジナルレシピで情報発信というお話がありましたが、県では「だし活」という、だしを使うと美味しくなるので、塩を使わないで健康になろうという取組を8年間やっています。健康意識の高い方には、結構、浸透してきたなとは思っています。ただ、若い方とか、あまり健康に関心のない方には、まだまだこれからもっとやっていく必要があるだろうと考えていまして、料理研究家の大原千鶴先生に御協力いただいてレシピを考案してもらい、「あおもりだし物語」というテレビ番組を知事も出演して発信しました。これからもそのような話題性をもちながら、情報発信していければと考えています。

(知事)

健康づくりでは、県民の野菜の消費量が、1日250gから300gに増えました。塩分の消費量は変わっていないんだけど、野菜を食べると、ナトリウムを排出するので、「だし活+だす活」ということで地道に取り組んでいます。よろしく応援してください。

(斎藤美佳子氏)



私は、主に在宅ワークでパソコン、インターネットを使った仕事をしています。他にタブレットやスマートフォン、カメラ、何でも使っていますが、とにかくインターネットがないと、仕事は何もできないという形です。

実際にやっている業務は、スタートアップベンチャー企業の顧客サポートや、Zoomのサポート、訪問マッサージ治療のレシピ代行、劇団のWebサイト更新、それからAOITを経由して電子書籍制作など、毎日やっているものから年に数回のものまで様々あります。また、さいとうサポートのブログの運営やライターの仕事、訪問でのITサポートや、講師活動もしていますが、ほぼ全てリモートワークで自宅の事務所で行っております。

私のこれまでの経歴ですが、北海道で生まれ、父が道立高校の教員だったので、数年おきに転勤して暮らしてきました。

11歳頃から学校に行けなくなりまして、15歳から札幌のフリースクールに3年間通ってから、20歳の時に劇団に入るために上京しました。その後、8年間で北は北海道から南は沖縄の宮古島まで全国で巡演したり、音響スタッフや事務や営業、広報などを担当していました。

そして、2012年、弘前出身の夫と3歳になる直前の子どもと一緒に弘前に来ました。夫にとっては岩木山とか桜とかねぷたとか、津軽の自分の原風景と一緒に子どもと共有しながら子育てをしたいという思いがありまして、私は、どちらかというところを転々として暮らしていて、故郷へのこだわりというのがなかったので、じゃ行ってみようかということで、一緒に親子3人で移住してきました。

いろいろな経緯があって独立開業することになったんですけども、私のことを知っている人が誰もいない中での開業だったので、まずは自分を知ってもらおうというブログを設置して、毎日更新をすることを当初頑張っていました。

特によそから来た移住者の目線で、弘前エリアの情報、面白いと思った津軽弁のこと、津軽ならではの風習のことなど、例えば、法界折というのをお墓に供えるとか、そういった記事を書いています。

また、こぎん刺しにはまり「みんなのこぎん」というサークルを作って活動をしています。

元々着せ替え人形の服を作るのが好きだったので、着せ替え人形を作って、ハンドメイドイベントで売ったりするようなことも発信したり、自分が経験してきた不登校の体験などについても発信をしております、それについて、いろんな方からお問い合わせをいただいたりをしています。

一番頑張っていた時期では、月10万回ぐらい読まれるブログにすることができて、その後もブログを見た方からお引き合いをいただいて、お仕事につながっています。

こぎん刺しサークルの活動としては、弘前のスターバックスで、こぎん刺しのカバーが付いたベンチが設置されていたので、ここで友達とおしゃべりしながらこぎん刺しを楽しんだら面白いんじゃないかなということで、フェイスブックとかツイッターとかで呼び掛けて始めました。これは2015年からですが、去年からはコロナ禍のためにカフェでの集まりは控えています。

ただ、毎回やるたびにInstagramやツイッターなどで発信しているので、例えば、地元のサッカーチームのブランデュー弘前からお声掛けいただき、こぎんを使ったチームのグッズを制作したり、ホームゲームをやっている時に、会場に来た親子さんにこぎん刺しの体験をしてもらうワークショップを開催するなどの活動につながりました。また、弘前公園で冬に咲く桜ライトアップという取組のクラウドファンディングの返礼品を作るなどの受託を行っています。

コロナ禍になってからは、カフェでおしゃべりをし、飲食しながらこぎんを楽しむということができなくなったので、Zoomなどを使って、オンラインで開催するようになりました。そうしたところ、今までは弘前に来ないと出来なかったんですが、県外の方ですとか、またアメリカにお住まいの青森市出身でこぎん刺しを楽しんでいる主婦の方からメールをいただいて、一緒にチクチクしたりすることも出来ました。また、集まってやれるようになりたいと思っていますが、それまでは、こういったオンラインでの活動を続けていくつもりです。

私は、インターネットが普及し始めた頃からよく使っているんですけども、少数派こそ、Webを活用してつながっていくことが大事だと実感しています。

先ほど申し上げましたように、不登校の経験があったので、その体験を発表するのも、わりと早い時期からやっていたので、同じ境遇の人からお問い合わせをいただいてつながりました。

こぎん刺しも、ハンドメイドブームではありますが、まだまだごく一部の人が知っていることです。こう言うは何ですけども、青森県民であることも、かなり全国から見ると少数派なので、そういった人たちほど、自分たちの状況を発信してつながって、県外の人、市内の人、お互いに交流していくことが大事かなと思っています。

それが、仕事になるかどうかというのがありますが、仕事じゃなくても、自分の趣味であったり、あるいは、ちょっと生きづらさを抱えている時のマイノリティーの心細さであったり、そういったところを超えていけるような、自分の暮らしを豊かにするためにもっと仕事と関わりのない一般の人でもインターネットをどんどん活用してほしいなと思います。

私は、インスタやツイッターやブログや、最近、YouTubeも始めまして、とにかく手当たり次第、いろんなところに発信をして、弘前暮らしの楽しさなども伝えていきたいと思っています。若い方はインターネットが得意だと言っても、受信して、シェアする、拡散することは得

意でも、自ら発信するところがなかなか行き着かないということが多くありますので、ぜひ、これから県にも御協力いただいて「あっ、こんなふうに使えば、もっと楽しくここで暮らせるんだな」ということを紹介していただきたいと思います。

また、こぎん刺しのように伝統工芸の分野の方は、I Tが苦手な方が大変多くいらっしゃるので、そういった方にも、ぜひ、手軽な形で、こんなふうに、今は誰でも、いつでも、どこでも発信できるんだよということをサポートしていくようなことに、力を貸して欲しいと思います。

(知事)

早い時期からW e bを活用されてきたとのお話でしたが、W e bで多くの方が一人でないと感じられる、多くの人を救う、誰とでもつながっていけるというのは、すごく素晴らしいことだと思います。良い形で前向きに使っていけるということを、我々としても多くの県民に知ってもらうことの努力をしなければいけないと思っています。

伝統工芸は、ブナコや金山焼は攻めの姿勢でやっています。津軽塗も、色を変えたり、キャンペーンのやり方を変えたり、いろいろなことをやってきました。

基本的に、伝統工芸は、どういうふうに作っているかを見たらすごく興味を持ってくれると思います。斎藤さんは、こぎん刺しの刺す楽しみをしっかりと発信してくださっていますが、それが他のいろんな伝統工芸をやっている方にも波及して行って、それぞれがネットを使ってキャンペーンをできるようになり、つながっていったらどれほど面白くなるのかなと、本当にそう思いました。

(新産業創造課)

少数派こそデジタルというのは、本当にそのとおりでと思います。いつでも、どこでもつながれる、こういったことをテーマに青森県庁としても様々な取組を進めているところです。

若い世代がデジタルツールを、受信はできても必ずしも活用できていないということに関連して、知事からユビキタス出前授業で、お子さんの方にこういうデジタル機器があったら何ができるかと考えてもらって発表していただくということをやってきており、これまで知事に1, 055名の児童を直接指導いただいています。

あと、地域の各企業、A O I T参画の理事さんの企業さんが多いんですけども、一堂に集まってもらって、子ども向けや、子育てでなかなか仕事上デジタルに関わらないような主婦の方など、そういった方々向けに様々なフェアをやって、こういう活用ができるんだということを、県としてPRしているところです。

引き続き、少数の方がいつでも、どこでもつながれる社会を作るべく、取り組んでいきたいと思っています。講師等、不足していますので、また引き続き御相談させていただければ幸いです。

(地域産業課)

先ほど、知事の話にもありましたけども、やはり伝統工芸においても、想いを伝える一つの手法としてオンラインの活用は、不可欠になってきているのかなと考えています。

工芸品に新たな価値を付け加えて、新たな販路で売っていくような場合、E Cサイトを活用することで、新たなところへ伝わっていくことが考えられますので、非常に重要だと思います。

特に本県では、工芸品を作る方は本当に一流の方が揃っていると思いますので、私共としまし

ては、オンラインを活用しながら、それをいかに対外的に売っていくかというところをこれからも力を入れていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

(松丸良平氏)



私は、華やかな職業にすごく憧れていまして、大学卒業後は、出版社とか外資系のメーカーなどで仕事をしていました。

その中で転勤があり、最初の転勤が札幌だったんですけど、その辞令が出た時、本当に頭が真っ白になって、すごく嫌でした。さっきの大浦さんの話じゃないんですけど、やっぱり地方に飛ばされるということが、何かビジネスマンとして負けのような感じもしたし、そもそも、私は冬

や雪に対するイメージがすごく悪かったんです。なので、その時はせめて福岡だったら良かったと思っていたんですけど、当時、福岡から札幌に転勤になった先輩がいて、九州の台風に比べれば、北海道なんかは全然大したことないよ、というふうに言われたことをすごく覚えています。

そんなネガティブな気持ちで地方生活が始まったわけですけども、これが実に快適でした。仕事もプライベートもすごく楽しくて、生まれてから30年ぐらい、東京圏で生活をしていたんですけども、本当に世間知らずだったなって思いました。劇的に自分の価値観が変わってきて、都会で暮らすよりも、地方暮らしの方が性に合っていると感じるようになりました。

後ほど、課題としてお話をと思っているんですけども、最初の地方生活が札幌で良かったな、多分いきなり青森だと、方言についていけなくて挫折しただろうと思っています。

今、藤崎町に住んでいるんですけども、それまでは、新潟の長岡にいて、それなりに大きな会社で仕事をしていて、転勤が多い会社だったんですね。その間に結婚して、子どもが生まれて、自分の将来、家族の未来を見据えると、私の妻が金木出身なんですね。それで、私も青森で転勤のない落ち着いた仕事をするのが、この先の人生、ベストなんだろうなって思うようになりました。

そんなことを考えていた矢先に、求人を調べていたら、ふじさきファーマーズLABOの求人を見つけ、応募したところ、運よく採用され、2018年4月30日のグランドオープンより総括店長として仕事をしています。

今の仕事は、まさに私にとって願ったり叶ったりです。地方生活をしていく中で地域に役に立ちたいという思いがありました。先ほど申し上げたとおり、地方暮らしがすごく快適だと思ったので、他の人にもぜひ勧めたいなって思ったんです。そのためには、働く場所や、適切な所得を得られる場が当然必要で、地域産業を活性化させていかなければいけないのですが、自分が携わることができてうれしく思っています。

今、食彩テラスで、産直の運営や、レストラン、観光案内所の総括的な施設管理をしているんですけど、仕事の根本は、地域の活性化、地域の稼ぐ力を強化することで、農家さんを中心とした地域の生産者、事業者さんが稼ぐことのお手伝いをしていくことだろうと思っています。

こういった活動を通じての課題ですが、先ほど申し上げた言葉の壁がすごく大きくて、過去形じゃなくて、現在進行形で大変なんです。

津軽での生活が3年ぐらい経過したんですけども、親密になればなるほど、皆さん、地の言葉で話してきます。ただ私たちがやっているのはビジネスなので、すごくお金が絡むしセンシティブな部分があるんですけども、そういうことをやり取りしていく中で、私は、言っている意味が何だか全然分からないし、相手からしてみれば標準語を喋る得体の知れないやつだというふうには私のことを思われているかもしれないんですけども、なかなか趣旨が上手く伝わらなくて、例えば、軽トラ市というものを農家さんに儲けてもらおうと思って企画したんですけども。声をかけていく中で上手く趣旨が伝わらなくて苦勞をしました。

若干、話が脱線するんですけども。私、やっぱりUターンの人財には期待することが大きくて、今、藤崎町でも地域おこし協力隊でUターンの若い人が来ているんですけど、私は半ば本気で私はあなたたち、津軽弁の通訳として活躍をして欲しいということをいっています。

私というか、食彩テラスとして今後取り組んでいきたいことですが、若い人たちが次の担い手になるきっかけづくりをしていきたいなと思っています。具体的には、産直に農産物の商品を出荷することが楽しいと思われるような仕組みだったり、もっと稼いでもらうようにサポートしたり、新しいアイデアを実践できる場にしていきたいと思っています。現在、レシピコンテストみたいなことを仕掛けてみて、インスタグラムにレシピをあげてもらうような取組も行っています。

最後に県と一緒に取り組みたいこと、期待することですが、地産地消の取組強化というところに尽きると思います。県でもいろいろと取組をされていることは存じ上げているんですけども、Web全盛で、当店もSNS等を活用したPRをしているんですけども、当然、お店に来て物を買うのも、購入される方とのコミュニケーションも99%以上リアルな場で行われているわけなので、少し時代錯誤な感じがあるかもしれないんですけども、やっぱり売場の商品の近くに青森県の農業の取組とか特長、この野菜はこういうふうに美味しいというようなことをもう少しアピールできるようなコンテンツがあってもいいんじゃないかなって思っています。それは、ポスターや動画コンテンツとかでもいいと思うんですけども、できれば、スマホみたいなデバイスを使わなくても、老若男女が一目見て理解できるようなものが望ましいのではないかと思います。

あと、発信する内容は、良い情報だけじゃなくて、悪い情報があってもいいのかなって思います。例えば、異常気象でトマトの生育が不良であるとか。実際今年は、トマトが不作です。そういった情報を得ることで、一人ひとりが環境問題やSDGsなどを考えるきっかけになるのもいいんじゃないかなと思います。このまま温暖化が進めば、美味しいトマトが食べられなくなるみたいな、そういうきっかけづくりを、県と一緒にやっていきたいなというところです。

(知事)

言葉の壁の話ですが、自分も議会で、議員から事前に文章で通告された質問はわかるけど、生の言葉で質問されると「あれ？何を聞かれているんだろう？」ってこともあります。

弘前大学医学部でも、方言が分からないということが多くあるようです。「ニヤニヤする」という昔からの言い回しがあって、苦しい時とか、伝えやすい感じですが、若い看護師さんもお年寄りの言葉が分からないことが多くなっています。

東北電力でもコールセンターで津軽弁がわからないという問題があって、弘前大学と東北電力で、津軽弁の特に難しい言い回しも含めて集めて、AI技術で標準語に変換できないかという

取組を行っています。IT関連の皆様、ぜひよろしく申し上げます。

松丸さんの話で言うと、お店へのクレームでも、やわい、とかはまだ分かるけど、もっと硬いのが欲しいとか、色が付くか付かないとか、金銭に関わることだから、すごく苦勞していると思います。

売場での情報発信について、確かにQRコードでピッと読み取れば、土壌の成分も分かりますってやっているんですが、道の駅に来る人たちは、基本的に地元の人で、一定の年齢の人が来るので、確かに、ポップでもポスターでもあった方がいいかもしれない。例えば、つがる市にメロンロードというのがあるんですが、本当はスイカも美味くて、歴史もこうなっているって解説したらすごく分かりやすいと思います。意外と青森市の人には知らないですから。IT時代だからこそ、現地で一目見るのも大事だなということを改めて思いました。

イオン琉球のセールスでは、ラジオの枠を買い取ってやっています。本県と同じ車社会だから、ラジオ番組をやっている2時間半ぐらいの間に買いに来るわけです。プロの松丸さんが言うように、スマホで調べれば分かる、というのではない従来型の手法についても真面目に考えたいと思います。

(総合販売戦略課)

商品に近いところで情報を発信したいということでしたが、それに近いことでいくと、県で地産地消キャンペーンをやっており、期間中は、県産の農林水産物とか加工品とか、あと、さっきのだし活とか、健康づくりとか、そういうのを紹介するような動画を売り場で放送していますが、御提案の店舗の売り場での発信の仕方について、考えてみたいと思います。

あと、若い方に出荷を勧めていきたいというお話ですが、一つ紹介したいのは、中南地域県民局で、食彩テラスさんも参加していると思いますが、産直マップの作成とか、スタンプラリーとか、FMでの発信とかをやっていて、そのうちの一つで、農協に出荷した農産物を福祉施設の人が袋に詰めて、産直に出すということに取り組んでいます。高齢化が進んで、出荷が進まない中で、出荷を増やすよう取り組んでいますので、一緒にやっていきたいと思います。よろしく申し上げます。

(新産業創造課)

先ほど、津軽弁のAIの話がありましたが、ずっと弘前大学と進めておまして、今、方言等を入力するホームページを立ち上げて、皆さん、自由にに入れてくださいって、AIのディープラーニング中です。少し時間がかかりそうですけども。

それ以外でも、私は経産省からの出向なんですけど、経産省から藤崎町の地域おこし協力隊に女性の私の友人が来ています。そういったいろんなやり方で地域を若者が支えていく形があると思いますので、引き続きどうぞよろしく願いいたします。

(知事)

本日はありがとうございました。リモート参加の古川さんもありがとう。

すごく元気になりました。最初「ユビキタス、君ならどうする」というところから、いろいろやり出しました。初歩的なことを子どもたちとずっとやって、裾野を広げていこうということをやってきました。

I Tを活用して、松丸さんは少し違うかもしれないけど。とにかく、この青森で新しい生き方をしてくださっている方々がいる。そういう生き方を次の世代が感じてくれて、寒くて暗くて遠い青森じゃなくて、実はここは生きがいがある土地なんだ、仕事の面でも実はこんなに豊富な生き方ができるんだということを、次の世代の人たちに見せてくれていることを大変嬉しく思います。

自分は、地道に、小学生に向かって普及啓発、基礎のところから丁寧にやっていきます。皆さんは、言い方が昔風だけど、これから突っ張っていただきたい、

コロナ禍であり、いろんなことがやり難い時代ですが、あのコロナの時代を、すごくきつかったけど、皆で生きたよね、乗り越えて次の時代を作ろうってやったよねっていう、今日はそういうきっかけにもなれば嬉しいなと思っています。

本当にお忙しいところ、ありがとうございました。

